

ま しょう
魔聖両義論 II
——二項分立を超えて——

三 宅 雅 明
(武庫川女子大学文学部英語文化学科)

Beyond Binary Opposition II
——Logos-chaos in the Witching/sacred Structure——

Masaaki Miyake

Department of English,
School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan.

There has been, in all cultures, a wide-spread tradition of binary opposition. This tradition has been a main weapon of man's logical manipulation of the nature objectified. In other words, the nature objectified has been controlled by the symbolic activities which encourage the progress of human culture.

Thus, the aim of this paper will be to establish a new idea of "beyond binary opposition". The present writer suggests that the Witching/sacred opposition be overcome by a new concept: "double-meaning-ness". Such a kind of study has not been done. Even he still does not have a clear perspective of a world "beyond binary opposition".

柔軟に風に揺れゐしコスモスが揺れ止みてより不安定となる 久米川 孝子

I. 主題への前奏 [前号より続く]

1. 3. 文節構築, またはロゴス=コスモス [前号より続く]

分節構築の要素として, 言語そのものの性質, 認識と行為のからみ, 創造性の発揚などがあげられる。〈ところ〉に浮かぶさまざまなイメージを記号化し, 編集し, 定式化していくのである。このような試みが, カオスからロゴス=コスモスにいたる文化的行為なのだ。

その昔に語られた「光あれ」は, そのまま, 「光」と「非-光」の差異化であった。光と闇とに二分したうえで, あらためて「光」に優先権をあたえたものであった。このようにして, 分節構築のひとつひとつの〈たち〉は, 言語によりかかってなされた。いうなれば, 言語的論理の純化である。このとき, カオスへの, あるいは, 現実への忠実度が薄れ, 〈仮想〉性が強まってくる。もちろん, このような遊離ですら, もしそれが鋭敏に自覚されていたら, 特定の思想的イデオロギーに過度にこだわって, 認識上の苦しみに陥ることともなかったであろう。

そもそも, 近代の西ヨーロッパにおける分節構築の基軸は, 人権, 平等, 自由などであった。加えてまた, 論理的整合体としての近代の自我は, 主体と客体, 〈ところ〉とモノの峻別の上に築かれた。単独者

ニーチェのいう「力への意志」は、分節構築からの取り残された部分の活用という合意もあったであろう。言語化とは、対象に内在するロゴスを探すことだとするのは、なんとも狭量な考えだ。ロゴス=コスモスの設定は、そのまま、カオスの存在を暗示すらしているのだ。分節構築は、不思議にも、それ自体のよって立つ原理と構造を獲得していくにつれて、カオスを無視する方向へ進んでいった。いわゆる〈イデア〉は、カオスを恐怖とみなしたことから生じたストイシズムが生みだした概念なのかもしれない。

分節構築は、いたるところに存在している。分節構築とは〈かたち〉への意志である。直立二足歩行のヒトにとって、安定した〈かたち〉への衝迫である。とはいえ、おおく分節構築は、錯綜した現実と対照させるという手続きが十分ではない。現実世界よりも構築のありようが問われるからである。分節構築が意味の一義性をもとに形成されるときに、その分節構築が、現実を多角的に見ることを省略してしまうからである。強烈な分節構築ほど、現実適用しうる範囲が狭くなるのは、皮肉なことである。

ヒトの歴史は、思考・技術・文化の構築によって、生命の保全に対処していく過程であった。しかし、これらが、ひととおり、達成されてしまうと、カオスの感受力が減少し、わずかに残ったその感受力も貶されがちになっていった。加えて、ヴァーチャル・リアリティなるものに興味を増加させたりしているのである。

真理なるものは、脳がそれを感じたときに成立する。ときに、それは、脳のファッションとなる。真理だと思うものは、真理についての幻影であり、脳内現象であるにとどまる。ヒトは脳が思考する形式から逃れられない。分節構築を試みることは、ヒトの脳のはたらきを間接的に述べることなのである。

その過程において、神話という分節構築は、シンボル機能の発揚によって、森羅万象にたいしてヒトがもつ原感情の表出であるとみなすことができる。ヒトは、なぜか、環境自然に、自然を超えるものを求めた。もし、これらを言語の自己運動と考えたりすれば、二重に超越的となる。

いっぽう、自然科学系の分節構築が、人文社会科学系の分節構築と違うところは、客観性、論理性、普遍性、再現性などを検証可能な形としてもっていることにある。物理の世界においては、あるものはあって、ないものはない。あるものをないものにできない。脳は、面白いことに、あるものでも、ないことにできるし、ないものでも、あることにできる。たとえば、自然に存在する線は、フラクタルである。直線も円も、自然界には存在せず、ひたすらそう見えるように脳が機能しているだけのことである。

生きていることの臨場感は、光と闇の双方から生じるのであろう。ヒトは、未分の状態から、自然との共生から抜けだして、文明をもつにいたった。人工的技術によって自然を変容させ、さらには、人工物によって世界を埋めつくそうとした。これは、ヒトにとって、避けがたい衝迫であった。そのような過程を展望すると、創造と破壊との両義性が、いやでも目につく。

いまいちど、いう。世界の分節構築は、〈こころ〉の欲望である。欲望のないところには、構築への意志は発動されない。ヒトは、太古の昔から、天を仰ぎみて、宇宙に想いをはせた。あらゆる分節構築は、想いを遠くまではせたぶんだけ、バイアスがかかっている。真実とは、そう感じるひとの脳内ではそうなっているということだ。とすれば、どの分節構築も、叩けば、ホコリが出る。もちろん、ホコリくらい、叩かなくても出る。

もとはといえば、世界分節構築への過程において、おおくの可能性を締めだすことによるのみ、世界₂を経由して、その抽象界たる世界₃を出現させたのであった。ひとびとが、さまざまな世界分節構築を、認識の矛盾としてではなく、そのまま、許容するときがあるとなれば、それらへの対応が、知性の自由な演戯として出現するときだけであろう。

1. 4. 言語

ヒトがヒトであるためには、大脳新皮質のはたらきである「シンボル活動」が不可欠になる。ホモ・シグニフィカンス(記号による意味づけをおこなうヒト)の特徴として、脳による「シンボル活動」を挙げてよい。宗教的分節構築、芸術的分節構築、科学的分節構築は、手短かにいえば、〈意味〉への渴望の差である。ヒトはシンボルによって生命を養う生き物である。動物のなかでも、ひとときわ抜きんで、シンボ

ルを流暢に使いこなす。「シンボル活動」をヒトの営為から差し引くと、ヒトの生は薄っぺらなものになってしまう。

ヒトの意識のほとんどすべては、言語によりかかっている。言語というシンボルを獲得したヒトは、存在と非存在を自在に分節し類推する。なにかに焦点を合わせ、それにしたがって、〈意味するもの〉をつくりあげる。言語という、優れた、抽象力のあるソフトウェアで満たされているのである。言語による分節構築は、ヒトの脳の機能の過剰から生じるシンボル空間である。この空間において、なにかを真理とみなしたい知がうずく。この〈知〉にうながされて、言語は、カオスをロゴス=コスモスの「明るさ」へ変えていくと信じさせる力をもつ。

つまり、ヒトの精神史は、言語による体系の製作の歴史であったのだ。言語は、自然世界からの驚異的な分化であった。言語によって、基礎要件を〈仮想〉し、それがヴァーチャルであることを忘れさせる精巧なシステムを構築してきた。ヒトは、このようなことのために、知恵の限りをつくした。カオスの明証は不可能であることを、カオスをふくまない言述の連続によって粉飾する。かのヴィトゲンシュタインですら、それを「言語ゲーム」とみなすほかなかったのであった。ヒトは言語によってカオスを射しつらぬいたつもりが、言語自体と、射しつらぬかれたカオスによって、あらためて、射しつらぬかれる。

言語は、人間の世界を強力にしばっている。主語に述語を配するという構造化こそが、拡散と放恣を食いとめる。言語の線状性がロゴス=コスモスの条件となった。多方向に散開する個人の実存と欲求をどう共同体とつないでいくか。存在しつつも、語られる声を失った膨大な領域に、あらためて分節構築をおよぼすのは、不可能なことなのか。

言語は、自然界における物的現象とは異なる象形文字においてすら、それ自体、文字であることによって、世界と切断される。「木」(キ)は、どうあっても、現実の樹木から切りはなされている。ナマの自然から、言語が離陸したさま(脳の〈突出〉)は、どのようなものだったろう。頭蓋骨の大きさから判断して、言語意識が芽生えたのは、一六〇万年前のホモ・エレクトゥスくらいからであったという。言語は、思考と情報をつくりだし、それらを伝える生物学的適応の現れとなった。すでにダーウィンにおいて、ヒトのシンボル能力は、「本能的傾向」として示された。この「本能的傾向」は、大幅な人為的言語操作を可能にしたのである。

言語の歴史は、カオスに訣別し、ひたすら自律へむかって進んでいった。これは、言語が内在させている経済性が表に出たものであった。言語は、抽象化・道具化・自己目的化をはらんでいたのだ。意味情報は、知覚形式をとおして、表現しなければならない。意味づけるという作用は、ものごとを、おおくの意味づけの関係系へもちこむことである。意味が成立するには、多少とも共時化しなければならない。意味は、もともと、言語の世界にぞくしているのである。ソシュールのいう「ランゲージュ」(言語を中心とする「シンボル活動」)は、分節性と非現実性を基本とし、〈個〉よりも〈類〉へむかう方向性をもつものであった。

情報がおおいということは、内容が不透明ということだ。外部情報をいかに選択するかは、脳内過程に依存する。外部の世界と内部の世界とは、べつべつのものだ。〈こころ〉は、このギャップを埋めることに苦悶する。言語は、内的世界の代弁者なのだ。じぶんの存在と考えをどのようなことばで紡ぎだすかが問題だったのだ。言語の機能は、コミュニケーションであるまえに、世界の表現として作用し、世界の認識を助け、ときに、世界そのものを限定する。言語は、このような過程において、社会的見地から見て〈指示性〉のつよいモードと、内的心意の表現力に頼る〈含意性〉のつよいモードとに分かたれるのである。

言語の芸術性を排除したロジカルな言語世界は、〈仮想〉のひとつのありようだ。詩において、ことばとことばとがエロス化するのは、カオスにおける未分の状態への憧れから発する。ことばは、意味の同一性を志向しつつ、たえず意味に変容をあたえていく。意味は、ゆらぎを内包しないと、適用範囲が、極度に狭くなる。現実が閉塞的であれば、生きる意味は、観念体系に求められていく。「真の」、「本当の」といったような概念も、両義感覚をもたない言語観がもたらしたものである。意味がいちばん〈華やぐ〉のは、一回きりの輝かしい発現においてである。そのために、記憶作用は、長い貯蔵の冬を耐えぬくのである。表現行為こそが、思念を言語の内部において顕現させる。表現を要素の結合と見ると、ことばは過度に静

態となる。それぞれの要素は、たがいに作用をおよぼしあうと考えられる。芸術は、分節構築の内部にあって、〈かたち〉としてものごとをとらえる愉しみをあたえる。〈かたち〉は意味づけであり、対象世界の連続性を断層的に断ちきるのである。

人生をまるごととらえることは、分節言語によっても、沈黙や「不立文字」によっても、原理的に不可能であり、それでいてなお、〈わたし〉の実存、〈いま・ここ〉という現存に酔いきれない。言語は、現実には、粗忽な網である。しかも、それに頼るほかに、ヒトは、なすすべもない。聖霊が降臨して、マタイにものを書かせたというイメージは、エピソードが特殊すぎる。

つまり、ラング(個別言語)の差によって、対象の切りとりかたも変わるし、加えて、それぞれのひとに依拠して、その切りとりかたにも差が生じる。ラングは顕在的言語体系として、分節構築に対応し、ラングはより基底的なシンボル化能力として意識下へ拡がっていく。言語を表層意識の制度化された〈かたち〉としてのみとらえると、その全体像を見うしなう。しかも、詩的言語をとらえるには、体系的な言語学や芸術学では、うまくいかない。人間と森羅万象との交感が、あらためて主張されてよい。言語は、そのさいに、腸管的流路となる。言語の〈仮想〉性をあげつらうよりも、その虚実のスキマに賭ける。

存在分節の歴史は、言語でどのようなことが可能だったのかの歴史だ。記号分節の歴史が認識の歴史なのだ。ただし、これまで、ことばが、普遍化するといっても、男の論理にしたがって、そうしてきたにすぎない。思想史とは、男の言語意識史である。思想史、哲学史、文学史を言語モード史としてとらえるのである。モードに深まる表現力とは、心身・言語の微細なゆらぎを顕現させる力である。既知に頼って整理することに加え、未知への戦慄を心身に抱きとることから生じるのである。

言語による分節は、言語であることによって対象から遠ざかり、言語であることによって、対象とやすやすと結びつく。言語がそこそこにあるだけでは、構築にはならない。意志がからむと、構造は表現となる。言語から見て、他者とは、人間のみに限らず、文化遺産、動植物、鉱物、そして過去の記憶のすべてをふくむ。

「法」というシンボル形態もまた、遅れてやってきたヒトの特徴のひとつである。分節構築としての「法」は、個としての文脈の抹消をおこなう。共同幻想をもつ集団を破る者への敵意のあらわれとしての「法」は、共同社会共通のルールは、明文化されない。たとえば、〈人間の肉を食ってはならない〉とは書かれない。「法」においては、判決、判例などのメタ系が山積する。「法」は権力の不定形を〈かたち〉と化し、力動化していく。エクリチュールの〈記号表現〉は、困ったことに、あるいは、素晴らしいことに、理解者の前にも、理解とはほど遠いひとびとのまえにも、同じ〈かたち〉をして通っていく。〈意味内容〉は、あとから、よちよち、ついていく。

以上の言述から、言語が〈仮想〉であり、明証であり、修辞であり、創造であり、牢獄であり、媒介者であることがわかりいただけただろう。ここから両義感覚への道は、ほんの数歩である。

1. 5. カオス

原初のころ、ヒトは闇を怖れた。闇への恐怖は、ヒトの DNA に刻印されているのであろう。カオスは、非定形の闇をふくむ。闇こそ、現在、過去、未来、またこの場所と異なった場所とが溶融するところだ。ここには、ロゴス=コスモス的な現実感覚など起こりはしない。加えて、脳の複雑化とともに、不安、過剰、幻想、錯誤がはいりこんでくる。これらは、カオスと隣りあわせている。エドガール・モランのいう「ホモ・デメンス」(狂ったヒト)の現れである。身体は、脳が忘れかけている自然(カオスを深く内部にふくんでいる)とともに存在する。

カオスは、分節構築として〈かたち〉をあたえることが不可能な、宇宙内の、また、意識下の、不分明な領域である。分節構築として取りだしがたい部分といってもよい。わざわざ触れるまでもないが、生成変形文法のいう〈深層構造〉は、カオスの概念とはまったく無縁なものとおきたい。

自然科学や数学においては、カオスとは、自然界における不規則性という概念に近い。量子力学の根柢にある不確定性、などである。カオスとは、もともと、謎の x , y , z だ。もし、謎の x , y , z を定量化し

て取りだせるとすれば、それは、脳と言語の力による。おおくの学問は、これを諦めて、あまりにもロゴス=コスモスだけを頼りにしてしまった。

このような分節構築へのこだわりには、その契機として、実存の不安があるはずだ。おおくの方節構築は、これらを無視してのみ成立していった。実存の不安として、つぎのような事柄をあけておきたい。

- (1) 推察がおよばない自己の始まりへの漠たる不安。
- (2) 言語によって世界の起源や全貌をいいつくせない不安。
- (3) ヒトがとらえた世界の分節構築自体の不安。時間(過去および未来)を発見してからの不安の増大。
- (4) 確実に未来に起こる死の予感。自己にとって、死とは、すべての消滅。しかし、世界₁は、なんら変わらないのではないか。
- (5) 他人とのあいだに発生する孤独感。

カオスからは、ヒトの欲望である〈意味づけ〉を投げてよこさない。〈意味づけ〉とはそういうもののなのだ。カオス、すなわち闇として残った部分についての思念の乏しさは、慨嘆にあたいする。

カオスを不合理なものともみなすことは、合理性への過大な信頼にひとしい。カオスと合理性の物指しは、共用できない。逆に、カオスを、悪魔的な魅力をもつものとして、飾りたてる必要もない。それでいて、カオスが悪意をもって存在するなど考えてはいけな。カオスという暗在的な状態こそ、大きな内的エネルギーの根源である。カオスが、つねに残されていることは、すばらしいことなのである。フラクタルによるスペクタクルもありうる。〈こんとん〉という表現は、文字も、響きも、とことん、なまめかしい。

エントロピー増大の物理法則(熱力学の第二法則)は、閉鎖系を条件として考えられたものであり、生命系は、もともと、開放系なのである。そのためには、つねに変化する外部の条件にいつでも対応できる柔軟性をもつことが個体にとって主体的なのである。デカルト式世界分節構築をきめこむと、カオスは、ゴミ溜めとなる。歯切れのよいことばは、それ自体において、カオスをスッパスッパと切りすてているということだ。カオスは、ロゴス=コスモスから遡及して、感じとられることがおおい。どのようなカオス感覚が世界を変容させる言述たりうるのか。

原初の知と身体の〈そよぎ〉(move)から発生してくる知の展開を大切にしたいと思う。分節構築されないカオスが存在するから、ヒトは豊かになりうる。ロゴス=コスモスなしでは暮らせないと同じく、カオスなしでも生きられない。カオスに思いきり深まったら、こんどは、ロゴス=コスモスを恋うことにもなろう。それこそ、両義的に生きることの、まっとうな現れなのだ。

1. 6. 欲望

生命とは、手短かにいえば、物質が欲望をもったものである。欲望があるから、ヒトは生きられるし、〈突出〉した欲望は、シンボル系を媒体にして、未来や幻想へむかってふくらむ。欲望は、快適へ、快感へ、幸福へ、意味へ、根源へ、身体へ、知へ、コミュニケーションへと、さまざまに分化する。すべてのものごとは、ヒトの脳の欲望から発する。欲望は、文明の推進力であった。とはいえ、快適さへの欲望から興隆した文明は、地球の資源が有限であるために、自己崩壊を招きよせる〈両義性〉を有するのである。欲望の表現は、ときに仮面をつけ、歪曲され、〈両義〉化される。

すべての分節構築の背後に、このような欲望が存在している。古来、ひとびとは、目に映るもの・心に映るものを乱雑なまま放置せず、それを、言語的秩序づけへの欲望によって、その一部(全部と思ひこむことがある)としていいあてようとした。世界の意味づけは、ヒトの欲望がむかう最大の方向である。これらが意識作用に先行し、主体=主観を限定する。欲望は、つぎつぎに、内在的に、また、顕在的に、〈かたち〉となる。ヒトは「シンボル活動」を欲望として〈突出〉させたため、他の動物にたいして、優越にして劣等という二重の負い目をもつことになったのだった。

欲望の存在は、いかにも自明なものである。ヒトは、とりわけ、感覚や意味への欲望を断ち切ることはできない。ヒトにおける外面化、すなわち、表現への欲求は、本能に近い。とはいえ、過度の衝迫によって、世界₂ないし世界₃をつかみとろうとすると、かえってカオスを見失うことになる。

心身は質感(クォーリア)を欲望としてもつ。欲望のうち、もっとも有力なものひとつが愛である。愛は、濃密な質感を保有する。「愛は、ひとつの小さい部屋を全世界に変えてしまう。」(ジョン・ダン「朝の挨拶」)と歌われたり、また、「あなただけが現実です。」(リルケからルー・ザロメへ)と語られたりする。愛と、過剰、差異、戯れとは、一步の開きしかない。

いずれにせよ、過剰、差異、戯れなどは、すべてヒトの欲望から生じる。真・善・美とて、〈こころ〉の欲望である。シンボルを行使する術を覚えてしまったヒトは、ひとつやふたつの欲望だけでは、折りあいがつかなくなってしまった。欲望は、野合し、乱舞し、交錯する。

分節構築は、それを掲げる特定の人間が、なにを知りたいかという欲望によって左右される。それをおこなう特定の人間がどう分節構築したいかによって左右される。それは、カオスとヒトの現実との架け橋であるとともに、現実を超えた放恣な欲望の形態でもある。欲望は、可能と不可能をしばしば混同してしまう。ついには、世界₃をつくることへ向う。たとえば、宇宙を知りたいという欲望が、宇宙創成神話や最新の宇宙物理学を生み出したのだ。

とはいうものの、カオスが、大いなる肯定をもたらすはずもなかった。カオスへの、心身の〈そよぎ〉(move)は、動詞的にいえば“be moved”(苦しみを嘗める)であったはずだ。欲望の充足は、この世においては実現しないなどというよりも、欲望自身が闇の奥底にまでおよんでいると考えるほうがよいのである。

II. 両義感覚をめぐる

2. 1. 両義感覚の意味的輪郭を描く

〈両義〉にあたるヨーロッパ系言語の単語は、見あたらない。探しまわっても、出くわさない。もちろん、「多義」とは異なる。多義は、表面に出ている(出ようとしている)おおくの意味であるにすぎない。「曖昧さ」とも異なる。西洋の考えかたは、せいぜい、“The test of a first-rate intelligence is the ability to hold two opposed ideas in the mind at the same time, and still retain the ability to function.”(F. S. Fitzgerald)くらいなことにとどまる。つまりは、両義感覚については、せいぜい、いくらかのスケッチを示すくらいが関のやまだ。

- (1) たとえば、雲は、両義的である。水蒸気が集中し、散開する。かたちを得ることが、そのままかたちを失うことに通じる。得るも、失うも、不分明である。あるのか、ないのか。始まるのか、終わるのか。生まれるのか、死ぬのか。境界線はない。

光も、両義的である。光は光らない。光を反射するモノがあってこそ、光る。光は、光とモノとの相関だ。光はモノがなければ、暗い。光は闇だ。夜明とて、黄昏への、黄昏とて夜明けへの方向性なのである。

- (2) 同一の事柄に対立する二つの意味が同時に存在する。どちらかが表面に出る。このことは、多義とは区別される。多義とは、複数の義が表面またはその近くに出ていることである。対立する二つのものは、切断などされておらず、同時同質の存在と考えたい。これをべつべつにとりだして、あとで結合させてみても、つまらない。指標性のつよい語は、それと同量の逆方向の指標とともに理解したい。原理と反-原理の融合とか、異質なものの共存とかという発想をも超えるのである。相補という考えかたも、なお不十分である。

ロゴス=コスモスは、ヨーロッパにおいては、強大、かつ独善となった。近代主義・自由主義・民主主義・社会主義など、どのような思想形態・社会形態であれ、なにかが発現し、発展していくことにおい

て、つねにそれと等重の反-動が内部構造から発生してくる。歴史的に発生してくるどのようなパラダイムも、両義的なのである。

言語によって表現されるものがあるということは、言語によって表現できないものもあるということである。これらのことは、コミュニケーションの可能性に通じ、不可能性にも通じる。ヒトは、言語を用いると同時に、言語に操作される。創造への衝動と破壊への行動も、同時に発生する。

- (3) カオスの非分節性は、あらゆる二項分立とそれによる分節構築を両義的なものにする。分節構築は、カオスの〈痕跡〉かもしれない。〈痕跡〉は、カオスそのものではない。ソシュールによって語らしむるなら、「世界はどのようにでも分節できる。普遍的な分節法などは、ありはしない。」ということだ。

すべての分節構築は、枠組みを設定することによって、想像力を限定してしまう。そのぶんだけ、カオスから遠ざかる。アリストテレスなどは、その分節構築の強度によって、カオスを見えなくしてしまった元凶だ。

言語によるロゴス=コスモス化で失ったもののうち、最大のものが両義感覚であった。ときおり出現する両義的なテキストにおいては、カオスが揺曳している。カオスからの分節構築の流れは、たえず、取り残されたものとの結合を遂げようとする。取り残されたものは、つねに残留する。ヘテロなものがつねにうごめく。

両義性の主張は、矛盾、逆説、背理などの、二項分立を前提とする概念を解体する。アイデンティティ不在の不安を緩和させる複数感覚と親近性を有する。分節構築は、それ自体において、また分節構築相互間において、両義性をもつ。ひとたび築かれたロゴス=コスモスは、その明視的な〈かたち〉だけが浮き彫りにされ、原カオスに内在する香さは、眼にはいらなくなる。両義感覚の前提として、ひとつひとつの分節構築が確実に分節構築であることを見きわめる必要がある。おおくの分節構築は、長所によって推進され、推進されることによって欠陥を露呈するという皮肉な結果を生みだしたのである。

- (4) 宇宙、生命、ヒトの発祥以来、あらゆる領域において、さまざまな両義性が存在してきた。シンボルによる分節構築も両義的である。

生命体は、自己生成・自己多様化(組織化)・自己言及をおこないつつ、つねに、外部に開かれている。外部情報の受容によって内的心象が形成され、変容される。有性生殖をおこなう生命は、それ自体において、両義的である。生の内部に、すでに死がある。原核細胞は、それ自体、完璧であったのに比して、真核細胞は、多様に集合して相互補足しあうことを目指してきた。機能の異なった細胞の形成でもあった。

生命には、〈存在〉と〈生成〉の両義性がある。すでに「～として」存在し、これから「～であろう」とする。もろもろの可能的・不可能的欲望の総体である。欲望の実現は、そのまま、世界との関わりであり、結果的に、欲望の死という両義性をはらんでいく。

簡単と複雑、偶然と必然、不可逆と可逆などを二重性として記述するのは、今日までの分節構築の伝統により、やむをえないことであつたかもしれない。これらを適切に理解するには、それら両者を生成させる原カオスとの関連研究が望まれる。カオスを排除した分節構築なるものは、言語としては論理的であっても、分節構築が生みだした世界としては錯誤かもしれない。

カオスは、東洋風には、荘子のいう「渾沌」に近いといえは近い。ただし、これを思考や言語ではなく直観によってとらえうると考えるのは、わたしには、錯覚だと思われる。広義の思考をふくむシンボル活動によってとらえることができないのなら、直観によってとらえることは、さらに困難であろう。そのような直観も、ひとたび認識というシンボル活動の内部に反省的に保持できるのでなければ、その存在すら意識できないのである。

両義感覚からすれば、原カオスを、「一」、「全」、「一にして全」というような語で表現しようとすることは誤解をもたらす。「一」は、「二、三、…」を予測させるし、「全」は、確定された存在があるのかのように錯覚させてしまう。

- (5) 近代にたいするに反近代という問題の設定にしても、いたって不毛である。問題は、分節構築とい

う概念自体である。理性と感性、合理と非合理のあいだに引きさかれること、それらを矛盾と称すること、それらを相反だと思ふこと自体からのパラダイム・シフトを目ざす。両義感覚をじぶんのものにする、じぶんが軽やかになる。分節構築という文化制度を解体しようとする動きが、現代思想に存在する。救出されるべき分節構築は、はたして存在するのか。両義感覚をもって、分節構築の歴史の背景を辿りつつ、あえて、この困難な問いに探りを入れていくことが期待される。このことは、分節構築的な方法自体への疑問とともにある。非物質的なものにたいして、どこまで構築的な方法が適用できるかが問題なのである。「人類は物質的な豊かさを獲得したが、心の荒廃をも招いた」というような論説の「ではあるが、しかし」の思考を廃絶させよう。たとえば、物質的な豊かさと、公害を増やし環境問題をつくりだすこととは、両義的なのである。

近代における都市化は、生と死の緊張から生のみを記号的に表象化し、建築もそれに順応していく。地下は死の影を失い、地下鉄が走り、地下街が形成される。阪神大震災も、自然災害であることはいうまでもないとしても、近辺の大規模な土木工事とのあいだに関連性がないとはいいい切れまい。そもそも、天災か人災かに二分しようということ自体が思考として不十分なのかもしれない。

自然保護とは、皮肉な名称だ。ヒトが自然を保護する？ いつ、ヒトは、自然の生徒から、自然の保護者になったのだろう。しかも、このことばの意味内容は、人間という視点のもとに自然をさらすということであり、自然は、それを勝手なことだというだろう。

- (6) 分節構築を虚構だというのは、それを、虚偽だといっているのではない。分節構築によって分節構築を相対化するという自浄作用を期すのである。さまざまな思考の枠組みの緩和を図る。客観化すればするほど、学問は現実との接点を見失うことを銘記しておこう。要は、思想の崩壊などという発想に踊らされないことだ。思想は、崩壊するから思想なのだ。終末論のいかがわしさは、両義感覚によって見破られる。分節構築のおおくは、じぶんの分節構築が反面性をもつことを、知らぬ存ぜぬで押しとおす。

ヒトは生まれてきたという運命を平等に担う。ヒトの存在条件は、生存の技術、習慣、社会規範、親族関係、記号による分節構築などである。分節構築の内部における差異性と共通性にたえず視線を向け、担い手のカオスと関係づけることによって、いかなる決定論にも陥らないようにしたい。

分節構築は一人歩きすると、直接に関係のないひとびとのあいだにも、対立を惹起し、対立を拡大させる。拘束力が大きいのである。ひとびとは、分節構築に隷属したり、支配の道具にしたりする。

両義性と近縁のものは、言語の、ファジーな、多義的な、文脈依存的な状態、つまり、言語のレトリカルな状態である。世界が両義的であることに、限りなく肯定の喜びをもちたい。宇宙からヒトまでを両義的に見なおすことが望ましい。〈ゼロ記号〉なき神秘感覚を目指す。哲学的な意味における〈根源への旅〉は無用だ。

〈懷疑する精神〉よりも、〈両義化する精神〉というコンセプトのほうが、より積極的だ。両義感覚は、巧みな言説に欺かれない。キーワードすら、両義化されるかもしれない。世にいう〈矛盾〉を、両義感覚をはたらかせて〈矛盾〉だと見ないことは、したたかな精神である。両義ないし両義感覚という概念は、明証的定義を与えるよりも、散開をはかるほうがよいだろう。どのような現実や幻想でも、それがどれほど、やくだたないものに見えても、なんらかの意味合いで、現実世界となんの関わりもないということはない。とはいえ、リアル-リアリティも、それほどリアルではありえない。

あらゆる事物・事象・分節構築の相互依存性をもっとよく認識する。ただし、西欧のロゴス中心主義、東洋の神秘主義などを多元的に並立させればよいというものではない。すべての分節構築は、限界をもつことによって存在できる。分節構築にともなう判断においては、〈深遠さ〉は、もっとも警戒にあたいする。生命と環境を両義的に見つめ、文化、宗教、価値観もまた典型的に両義的なことを認めなければ、つぎの世紀の〈知〉を創出できない。

人間の文化と社会が総合的であろうとするかぎり、つねに両義性をはたらく。マルクスの洗礼、ニーチェの洗礼、なんでもよい。洗礼は多いほどよい。両義は、すべてのものを虚心に見つめることから生まれてくる。〈世界には明晰で真実な命題が存在する〉と〈仮想は仮想にすぎない〉とを同時に取

りこむ。両者を二項分立化させない。両義感覚とは、どの分節構築を、どのように組みあわせて、矛盾のないメタ的言語世界を構築するかというようなことではない。

- (7) 過去の分節構築のいずれかに一筋につきあわなければならないとすると、人間がさまざまな言葉とつきあうすべを忘れてしまうし、歴史的なパースペクティブを失ってしまう。おのれは捨てない。文化は捨てない。すべてを、おのれのなかを通過させる。この行為には、十分な理由がある。世界に属しつつ、世界に対抗し、意味を付与しつつ、意味を公共的に限定される。「心に癒しを」とか、「救済を与える」とかといえば、それらの必要もないところに、それらへの欲求のしこりをつくってしまう。それよりも、分節構築を骨抜きにするのがよい。なにごとも、反転の可能性を尊重したい。〈ほんとうの〉豊かさとはなにかという問をも無効にしよう。そのような問いは、物質文明がもたらした感性の歪みに対置された無反省な二項分立なのだ。

現存する北米インディアンは、どのような知のシステムをもっているのだろうか。おそらく、じぶんたちが住んでいる世界の総体と方向性は、誰ももしっかりもっているのではないか。そこでは、動物としての人間の身体が、生きることとパラレルになっている。現代のテクノロジーのもとでの人間は、その時間と空間の速度・多様・変化に、身体をもつ存在としては、ついていけないのではないか。

ヒトはなぜじぶんたちが理性的であり合理的であると信じるようになったのか。これは根本的な問いである。杓い部分は、辺境なりに追いやってしまった。自己を待みすぎると、自己は空洞化する。ひとつのイデオロギーで世界に対応すると、観念のおおろ領域が狭いだけに、観念の厚化粧ばかりが目立つ。世界の解釈は無数にある。意識にとって、存在するものは脳に起こることだけである。理解とは、異質のものを脳の内部において連合することである。

そもそも、なんの権限もない〈ゼロ記号〉を垂直に持ちあげ、そこに無批判に根拠をおく言説への意志が、ヨーロッパにおける世界分節構築の中心だったのだ。なにものかを奉ってしまうと、それがもともともっている抑圧的・排他的力を発揮させてしまう。確固たる視点は、ほとんど、おびえである。両義感覚には、〈真の〉という発想はない。〈ほんらいの〉もない。「これが決定的だ」という発想を、きっぱり捨てることだ。愛の両義性とは、相手があるがゆえに、愛は完璧になるし、同時に完璧にはならないということだ。

眼があるから見えるのであり、眼があるから見えない。言語についても同じだ。同じように、未開も両義的であり、文明も両義的である。仮想と現実とは、その垣根を払うことよりも、両者を峻別した上で、なおかつ、両義的にとらえなければならない。

- (8) 分節構築とカオスの境界において、自己の思考を位置づける。文学や芸術に対応する場合も、そのようでありたい。分節構築に固定されず、カオスに錯乱せずに。境界領域の両義性まで解ると、あと一歩だ。両義性こそ、ヒトにとって等身大の思想となる。必要なのは、いかなる〈ゼロ記号〉をも相対化できる感覚だ。単一の分節構築の権威となると、すべてのことに、整合性を人為的に求めることになる。正義、理想、原則という語は、両義感覚からすれば、反語風になる。肯定すること、否定することは、たがいに寄りそっている。言葉を語源に向けて意味を求めると、両義的な方向(感覚・意味)をもっていることがわかる。主体と客体とは、迫る、迫られるを軸に、容易に反転する。

自他融合のディオニュソスの身体も、キリスト教的、または異教的一体性も、つねに分離分裂をはらむ。シェイクスピアにおける世界の分節構築の両義性を直視しよう。脱構築とは、こわすことではない。はずす、ゆるめる、ずらすなどによって、細部を見なおし、組みかえることだ。

両義性という言葉をしっかりとらえたときに、学問上の、思想上の、日常生活の悩みがスッと消えていく感じがするはずである。あわせて、言葉を文献学的束縛から解放させ、より原初的な感覚のもとに立ちあらわれるようにする。生きること脅威をあたえるような状況が、なぜ出現したのか。両義感覚の視点から解けるはずだ。

両義感覚論においては、「理想」や「正義感」や「使命」のような言葉は、きわめて小さい価値しかもたない。「絶対」についてはなおさらのことである。両義感覚論は、青臭さのないセオリーだ。両義感覚論は、分節構築内容の研究よりも、方法上、思考上の冒険をめざしている。

(三 宅)

不思議な越境の光が、射しこむ。思想の創造性が世界的な規模で低下しているいま、分節構築の両義性は、よく見える。光に向っては、もう探求の可能性が激減しているのではないか。多分節構築的な散種の姿勢をつらぬく。分節構築を学ぶのは、分節構築にごまかされないためである。光の内部に影を見ないことが、ヒトを滅亡の危機にさらす。しかし、哲学であれ、自然科学であれ、変化と流動の記述は、むしろ不得手であった。永遠、無限、究極というベクトルを立てれば、現世は、そのぶんだけ、幻像へと収斂していく。両義をめざすかぎり、ヒトは思考の柔軟なそよぎに生きる。[以下、次号へつづく]